

## 編集後記

今号では「学問の自由と歴史認識」という特集を組んだ。今年3月、朝日新聞元記者が名誉毀損だと訴えた民事訴訟が最高裁の上告棄却により私の完全勝利で終了した。判決は、同記者の書いた記事を捏造だと評価した私の主張の真実性を認めた。つまり、朝日新聞が1991年に掲載した2本の元慰安婦に関する記事が捏造だと、裁判所が判断したのだ。

同じ朝日新聞の元ソウル特派員である前川恵司さんと、その裁判を巡るさまざまな問題について話し合えた。自分が所属していた新聞社の欠陥について語り合う対談に応じて下さった前川さんに感謝する。

また特集では、ラムザイヤー教授の慰安婦に関する学術論文への理不尽な攻撃に対して論争を挑む三本の論文を掲載できた。有馬教授はラムザイヤー論文の学術的価値を具体的に指摘して「差別に関わることであっても、歴史的事実を示すこと、それについて議論することは、ポリティカル・コレクトネスに反しない」と主張された。まさに我が意を得たり、だ。

モーガン論文を読むといつも、米国の学界と言論界の自虐ぶりのひどさに驚かされるが、今号の論文では米国の「反日」の背景に文化マルクス主義やフェミニズムがあることを鋭く解明して下さった。

資料として、「柳錫春元延世大学社会科学科教授に対する起訴を憂慮する日米韓学者共同声明」を掲載した。この声明が契機となり、米国の「ウォールストリートジャーナル」2021年8月21日が学問の自由の侵害として同事件について詳しく取り上げた記事を掲載した。日本のメディアのソウル特派員は何故記事を書かないのだろうか。

本研究会の副会長でもある江崎道朗氏は、戦前の日本の反共愛国勢力には「右翼全体主義者」と「保守自由主義者」の2つ

のグループがあったと主張している。今号で江崎氏が取り上げた緒方竹虎は後者の代表的人物の一人だ。江崎氏は緒方について新著「緒方竹虎と日本のインテリジェンス」でも詳しく書いている。歴認研は「保守自由主義者」の系列につながるものとなりたいた願っている。

その他、岡島論文、久野論文、勝岡論文もそれぞれ読み応えがあり、多くのことを教えられる。中国武漢発の新型コロナウイルスのため、歴認研も様々な制約を受けているが、多くの方々のご支援のおかげで、このように充実した内容の研究紀要を出せた。心から感謝している。(西岡)

西岡力編『朝鮮人戦時労働の実態』について、本会顧問の伊藤隆先生に書評をお願いしたところ、ご多忙の中を快く引き受けて下さった。心から御礼を申し上げたい。

本号の拙論は、東中野修道先生より頂いた二冊の本が奇縁になった。日教組と中国による、二回に及ぶ教科書の共同研究。中国が「南京大虐殺」の利用価値に目覚めたのは、1982年の教科書誤報事件後のことだ。それまで彼らの脳裏には「南京大虐殺」は存在しなかった。ところが事件後の南京には「大虐殺記念館」が建ち、折から訪中した日教組には「大虐殺本」を翻訳させたのだ。日本は上手く利用された。(勝岡)

## 歴史認識問題研究

(年2回発行)

第9号 (令和3年秋冬号)

発行日：2021年9月17日

発行人：西岡 力

編集人：勝岡 寛次

編集部：歴史認識問題研究会

頒 価：1,000円

発行所：〒277-0065 柏市光ヶ丘2丁目1番1号

公益財団法人モラロジー道德教育財団

西岡 力 研究室

Tel：04-7173-3197 Fax：04-7173-3199

印刷所：株式会社 長正社